

させていることは明らかであり、妊娠はこの傾向をさらに助長するが、分娩は一時的にせよこの増殖をブロックするようである。このように変動をくりかえす腔内真菌は自己体内真菌と相互に移行しあつて温存されているが、一旦病的因子たとえば糖尿病が関与すると腔内真菌の検出率、真菌症頻度、発症率は生理的諸条件下における上限をこえて急激に増加する。

以上家族内構成人員各年令層（新生児・幼児、性成熟期、閉経期、老年婦人）における腔内真菌の消長ならびに自己感染の存在を追及し、夫婦間相互移行（性交感染）妊娠、分娩、産褥など、生理的諸条件下での変動、病的因子の負荷による影響についても観察したが、さらにこれら各構成人員間相互移行が存在することを比較的にしか検出されない真菌の相互移行、腔内真菌陽性、陰性別家族内真菌の動態から明らかにし得た。

79. 産婦人科領域真菌症に対する Pimaricin 軟膏療法の意義と臨床効果

（Pimaricin 軟膏研究班）

東北大、新潟大、順天堂大、東京大、昭和、日本大、慶応義塾大、横浜市立大、金沢大、大阪大、広島大、山口大、長崎大、熊本大

今回われわれは、外陰、腔真菌症に対し pimaricin 軟膏を使用し、14大学における成績を集積して、その治療効果を明らかにした。すなわち腔錠単独使用群と腔錠、軟膏併用群とではその一次治癒率、遠隔成績において明らかに後者が優れている。さらに集積データを分析した結果、外陰真菌と腔真菌の一致率は74.3%、不一致率 5.7%、また外陰にのみ真菌が陽性のもの 7.0%であつた。さらに腔錠、軟膏併用群において、腔真菌の消失よりも、外陰真菌の消失が遅れる傾向にあり、再発時にも、外陰真菌が先行する例がしばしば認められた。

したがって外陰、腔真菌症における外陰病変が二次的なものであり、腔内真菌が消失すれば自然治癒するとは云えないし、単に腔内真菌が流出して、外陰に附着しているとも云い難い。

上述した成績から、外陰、腔真菌症において軟膏療法が必要なことは明らかであり、併用群において、腔錠単独例よりも優れた成績がえられたことは当然のこととも云える。

pimaricin 軟膏使用の意義はこればかりでなく皮膚病変を主とする、乳児寄性紅斑、糖尿病性陰股部真菌症、肛門周囲真菌症などにおいても認められ、いずれも良好

な成績を示した。

追加

（昭和）大 張 南 薫

われわれの経験では、腔内 Candida 陽性、外陰部も陽性の症状に Pimaricin 腔錠、軟膏の併用療法を行つたが、Candida の消失は腔内の方が速かで、消失率も高く、外陰部の Candida は消失が腔内よりおそく、消失率もやや低いような成績を得た。

80. 外陰・腔カンジダ症に対する Amphocycline 腔錠の臨床成績

（大阪市立桃山市民）

井上 公男、依岡 孝明、呉 万 類
（国立大阪）神木 照雄、小林 種一

当科外来患者より抽出したカンジダ属培養陽性例44例に Amphocycline 腔錠（Amphotericin B 50mgと Tetracycline 100mgの合剤）を全例に連日腔内投与し、1部例には同クリームの外陰塗抹を併用して以下のごとき自覚的に優れた成績を得た。

実験対象腔内分離カンジダ属の同定結果は C. albicans が首位（61.36%）で、以下 C. parakrusei, C. stellatoidea などの順であつた。主訴は帯下感に比べ掻痒感が圧倒的に多かつた。カンジダ属連日培養の結果は、腔内容では「カ」最高消失日は水野高田培地（MT）では2日目（54.5%）、Sabouraud 培地（S）では3日目（45%）で、最終消失日は前者8日目、後者9日目であり、また外陰清拭材料では最高消失日はMTで3日目、Sで4.5日目（おのおの21.5%）、また最終消失日は前者11日目、後者12日目であつた。遠隔成績一治療後7日目検査にて、「カ」検出率は6日以下に比べ10日以上治療群に有意に低かつた。14日目検査では大差はなかつた。また2回の検査とも腔より外陰に再検出率が高かつた。

帯下感、掻痒感の消失は数日以内に急増し9～10日目には90%以上に達した。他覚症状一腔内容pH、腔壁充血度、腔清浄度もほぼ同様の推移で改善された。検査面で尿、腎、肝機能などには異常変化をみなかつたが、ただ赤血球数と血色素量の軽度減少（大凡10%）が認められたほか自覚的にも副作用はなかつた。

以上より本剤は新しい優れた本症治療薬であり、最低10日以上連日治療が望ましく、且つクリームの外陰塗擦併用が重要と考えられる。

質問

（名古屋市）松原 一太

1) 腔錠にテトラサイクリンが混合されているがアンホテリシン単独のデータが望ましいではないでしょう